

流域委員会定年制は「もったいない」

平成 18 年 9 月 18 日

細川 ゆう子

淀川水系流域委員会が始まって、6 年が経過しようとしている。優れた先生方、誠実に仕事をされる河川管理者、庶務の方、熱心な傍聴者の方、多くの出会いに恵まれた。さまざまな経験が昨日のように鮮明に思い出される。充実した日々を送らせていただいた。ただ、第二期委員会の行方には危機感を覚える。

「いつまでも第一期のことを言うべきではない」と言われるかもしれない。だが、あえて言わせてほしい。第一期委員会が始まったとき、各委員の挨拶を聞いて感じたのは、専門家の先生方の「新たな川づくり」にける期待の大きさだった。年配の先生ほど、大きな夢を語られる姿に感動した。私は猪名川部会の中の委員だったので、その後一年半ほどは、ほかの先生方にお会いできる機会は少なかったが、米山先生には大変感謝している。「猪名川を都市河川のモデルにしよう」と私たちを率いてくださった。

各部会で、まず現地視察をしようということになったとき、米山先生は「ぜひ、猪名川の源流を訪ねたい」とおっしゃった。しかし、二回の現地視察のコースに組み込むことはできなかった。先生は、同じ大学の先生に頼んで車を調達し、有志で自主的に行く手はずをつけてくださった。猪名川の源流が流れ出す小さな山は、頂上にプラネタリウムがあり、キャンプ場があり、携帯電話のアンテナの工事中だった。山を降りるとすぐ、道路の整備された町が始まっていた。「猪名川は、源流から人の気配のする、完全な都市河川なのだ」と衝撃を受けた。「さすがに源流の水はおいしい」と一緒に飲んだり、キャンプ場でお弁当を広げたり、猪名川の溪流が見える店でコーヒーを飲んだり、とても楽しかった。そして、そのときの経験が、猪名川を考える上で大変参考になった。何度か先生と一緒に猪名川の現地視察に行ったが、余野川ダムのダムサイトを見渡す場所に行くための階段が大変な急勾配で、行くたびに先生の足元がおぼつかなくなるのが心配だった。特に、4 年目のダムワーキングの現地視察のときは、おつらそうだった。

米山先生のお名前だけを挙げさせてもらったが、第一期流域委員会では、現役を離れた先生方の活躍が目覚しかった。ご自分の専門外のことにも好奇心旺盛で、熱心に河川管理者や他の委員に質問する。勉強されて、どんどん発言をされる。時給の出ないワーキングでも、現地視察でも、所属外の部会でも、どんどん出席される。本当に、命を削られるのではないかと心配なぐらいだった。(実際、4 年の間に体調を崩された先生は少なくない。流域委員会が無関係とは思えない)委員会の仕事がどんなにハードなとき

でも、先生方に比べれば、自分の年齢でとても泣き言は言えないとがんばれた。

淀川水系流域委員会の提言、意見書には、何十年もの間、これまでの河川整備に納得していない多くの先生方の「新たな川づくり」をめざす夢がいっぱい詰まっている。淀川水系の新しい河川整備計画に琵琶湖、淀川の未来を託すために、命を削るほどの思いがこもっている。いや、先生方だけではない。流域委員会に関わったすべての人の夢がかかっている。それを、どう継続し発展させるのか。第二期委員会にお任せするしかない。

これまで、傍聴席からずいぶん勝手なことを言わせてもらった。それも、第二期委員会に期待するからこそとお許しいただきたい。流域委員会に新しい頭脳が加わり、さらに発展した議論をしてもらえることはいいことだと思っている。しかし、それは第一期の委員の協力に加えてこそではないだろうか。けれども現実には、第二期が始まって以来、第一期委員のほとんどが傍聴にも来てくれない。古い気質の先生方は「第二期の委員に代わったからには、すべてを任せ口を挟むべきではない」と思っておられるのだろう。ある先生は「仕事ではないのに、本職を休んで傍聴には行けない」とおっしゃっていた。また最近ある先生から「委員会の定年制により出席を禁じられて以後、無資格者のレッテルを貼られた以上、出席すべきでない」と心に決めております。」との悲しいメッセージをいただいた。4年間命を削って働いた委員が、多かれ少なかれこのように思っておられる。それを、河川管理者はどう考えているのか。

委員会運営の予算がどんどん厳しくなるから、委員を一気に削減した。けれども、時給を下げてそれでもやってくれるなら、人数を絞らず続ける道もあったのではないか。4年間流域委員会の基礎を築いた委員のその後の処遇についても、検討しておいてもらいたかった。私のような一般の住民と違い、先生方にはそれなりのお立場がある。今後流域委員会に対して協力していただけるような受け皿の用意をしなければ、それこそ「もったいない」。近畿の最高の頭脳は、70歳を過ぎても十分貴重な働きをしてくれるはずだ。年齢が若ければ、頭も柔軟でよく働くとは限らない。少なくとも第一期流域委員会で定年制により去られた先生方は、大学現役の先生方が出席することも困難で苦しむのに比べ、はるかに意欲的に参加し、柔軟に理解し、新たな川づくりの理想を語ってくれた。それを、心ならずではあろうが、発言を封じるような実態は、琵琶湖、淀川の未来のために大きな損失だ。次は第二期の委員の任期が切れる。今度こそ、淀川水系流域委員会が、継続するほどに多くの人々が夢を膨らませられるような、輪がさらに広がり、多くの知恵が結集されるような、運営のあり方を検討してほしい。